

〔研究ノート〕

田代安定の台東調査と『台東殖民地予察報文』

Tashiro's East Taiwan Survey at the end of the 19th century

やまだ あつし

YAMADA, Atsushi

はじめに

1. 台湾大学田代安定文庫での『台東殖民地予察報文』関係手書き資料
 2. 『台東殖民地予察報文』と『北海道殖民地撰定報文』
- おわりにかえて

要旨 台湾大学にある田代安定の蔵書と手書き資料は現在、田代安定文庫として外部公開されており、手書き資料は WEB 上の画像として閲覧することができる。しかしながら田代の筆跡は読み辛く、従来の研究は手書き資料群をまとめて読み解いてはいない。

本論は、田代の台湾総督府民政局殖産部拓殖課での活動でも、特に『台東殖民地予察報文』と関係の深い台東について記載された、19世紀末作成の手書き資料群をまとめて読み解く試みである。それによって、田代の調査と報告書編集の過程、そして成果物である『台東殖民地予察報文』の問題点を明らかにする。

本論に關係する田代の手書き資料群は、フィールドノートと収集文書に分かれていた。フィールドノートは、台東に居住するピュマ族やアミ族等の言語に関する語彙ノートの系統と、調査日誌の系統とに分かれる。収集文書は、当時の台東の民政機構が収集した資料を田代らが書き写したメモと、田代自ら収集し分析した調査データ、および報告書類がある。収集文書のデータは後に報告書類とともに『台東殖民地予察報文』としてまとめられたが、当初の調査の重要部分であった「原野」の記述が『台東殖民地予察報文』ではばっさり削られるなど、手書き資料群が『台東殖民地予察報文』にまとめられるまでに大幅な改編があった。

『台東殖民地予察報文』で述べられた構想に限らず、田代の構想が当時の台湾総督府首脳部に取り上げられることは少なかった。『北海道殖民地撰定報文』など同種目的の報告書と『台東殖民地予察報文』の細部とを読み比べると、田代の計画の細部は、現実の殖民地開拓では成功し得ない構想が多い。それが恐らくは田代の構想が首脳部に取り上げられなかった理由であろう。

キーワード： 田代安定、殖民地撰定、台東殖民地予察報文

はじめに

田代安定(1857-1928)は、八重山や台湾を中心とする植物学・民族学研究者として知られている。その業績は長らく顧みられていなかったが、近年は中生勝美(2011)、大浜郁子(2013a、2013b、2014a、2014b、2015、2017、2019)、名越護(2017)、やまだあつし(2019、2021)、陳偉智(2020)などが議論している。田代が顧みられるようになったのは、台湾大学で田代安定の蔵書と手書き資料(フィールドノート・各種データや文献の書き写しメモ・報告書等原稿)が発見されたことが大きい。『沖縄結縄考』(田代安定(1945))や『台東殖民地予察報文』(台湾総督府民政部殖産課編(1900))や『日本芋麻興業意見』(田代安定(1917))などを除き、まとまった著書では残っていなかった田代の研究が¹、手書き資料の公開により詳細を理解できるようになったためである。2021年には八重山地方調査の報告書類であるが「東京大学理学図書館所蔵田代安定資料」が公開されたので²、田代はさらに注目されるであろう。

台湾大学にある田代安定の蔵書と手書き資料は現在、田代安定文庫として外部公開されており、手書き資料はWEB上の画像として閲覧することができる³。しかしながら田代の筆跡は読み易くないため、これを本格的に(2桁の手書き文書を比較検討しながら読み解くという意味で)読解した研究は、やまだあつし(2019)が鹿児島高等農林学校での田代の講義ノートを対象に行った程度である。田代のフィールドワークの全体像を明らかにした陳偉智(2020)にしても、田代の手書き文書全体を丹念に読みこなしと言えるか疑問である。やまだあつし(2019)の読解は、従来は紹介されるのみで、内容が明らかでなかった田代の鹿児島高等農林学校での講義内容を明らかにした。そして、4年度にわたる講義が(同じ内容を反復したのではなく)年度を経る毎に内容の発展と体系化が見られたことも解明した。それによって従来は田代の追悼で言及される程度であった、田代の台湾在住後期の思考についても、解明を進めることができた。

本論は、田代の台湾時代初期⁴に勤務した台湾総督府民政局殖産部拓殖課での活動でも、特に『台東殖民地予察報文』と関係の深い台東⁵について、田代安定文庫の手書き資料を読み解くことで、新たな知見を求めるものである。やまだあつし(2021、2022)が論じた通り、殖産部拓殖課は台湾で(北海道で行った事業をモデルとして)殖民地撰定事業を行うために設置された課であったが、事業そのものは中途2年間で終り、課も係へと格下げとなった。撰定事業の調査報告は、水産調査

¹ 『沖縄結縄考』は田代安定著となっているが、田代死後に長谷部言人が東京大学に残された田代の報告書をまとめたものであり、『台東殖民地予察報文』は台湾総督府民政部殖産課の名義で出された官庁報告書であって、一般的な著書とは異なる。『日本芋麻興業意見』も田代の植物研究のごく一部を示しているに過ぎない。

² <https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/tashiro/page/home> で「沖縄県下宮古列島結縄標本説明全」など14件が公開されている。URLは2022年3月27日確認(以下、本論のURLは全て同日の確認である)。公開の経緯は「「東京大学理学図書館所蔵田代安定資料」公開について」<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/science/news/20211025> に記載されている。

³ 「国立台湾大学図書館数位典藏館」https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/ntu_digital/page/all の中に「田代安定文庫」<https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/page/home> として収められている。手書き資料は、<https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/tashiro-search?q=> で879件を閲覧することができる。なお手書き資料の全てが田代の著作物というわけではなく、他人の手書き資料や、他人の著作物を田代が書き写したものも少なくない。

⁴ 田代の活動の時期区分について本論は、彼の台湾での最初の大仕事である台湾殖民地撰定事業に注目し、事業の残務処理としての『台東殖民地予察報文』刊行までをひとまとまりの時期にとらえ、台湾在住初期と呼ぶことにする。なお台湾殖民地撰定事業については、やまだあつし(2021)を参照。

⁵ 1909年10月に花蓮港庁(現・花蓮県)が成立するまで、台湾東部全体が台東庁(現・台東県)の管轄下であった。本論の台東は、この両庁(両県)を包括する地域名称である。

等の殖産部の他の調査事業報告とともに『台湾総督府民政局殖産部報文』として刊行されたが⁶、その中でも『台東殖民地予察報文』は大部であるだけでなく、台東地域の多様な情報が記載されており、特有の価値を持っている。しかしながら、やまだあつし（2021）で指摘した通り、田代安定の調査報告が全て、『台東殖民地予察報文』に記載されたわけではない。『台東殖民地予察報文』自体は陳偉智（2020）もその構造や狙いを論じているが、本論であらためて手書き資料を読解しながら分析するものである。

1. 台湾大学田代安定文庫での『台東殖民地予察報文』関係手書き資料

台湾大学田代安定文庫で閲覧可能な手書き資料は、他人の手書き資料や他人の著作物を田代が書き写したものを含め 879 件ある。WEB には「内容主題」「時代」「人物」「内容地点」「資料類型」のフィルターがあり、「内容地点」のフィルターから「台東」を選ぶと 64 点がヒットするが、この中には T091 文書「ダビッドソン氏ノ調査ニ係ル台湾産纖維植物附製紙植物」⁷のように他人（James W. Davidson）の著作の翻訳かつ台東は若干の言及に留まるものがある。今回精査したところ、『台東殖民地予察報文』に関連した手書き資料（最初の記号は台湾大学側でつけた文書番号、次は台湾大学側でつけた文書名、そして画像数、URL）とその内容は以下の通りである⁸。

1896 年作成（作成年の判断は台湾大学による）

文書番号が N で始まるもの（番号順）

N011 卑南、阿眉社土語 115 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714689>

題名は 1 枚目画像（表紙）に貼られた紙による。漢字とローマ字の対訳（ピュマ族語？を、その場で聞き取ったもの）が続く。94 枚目画像から 96 枚目画像まで空白。97 枚目画像から 107 枚目画像までから向きが反対（107 枚目が先頭）で、阿眉社語となる。

N014 卑南八社蕃語 会話篇 114 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714692>

題名は 1 枚目画像（表紙）に貼られた紙および画像 7 枚目の「卑南八社蕃語会話篇 田代安定編」の記載による。画像 7 枚目から画像 67 枚目まで中国語とピュマ語？の対訳が続く。画像 68 枚目から画像 106 枚目まで空白。画像 107 枚目から画像 111 枚目までは逆向きで筆談に使用。

⁶ 中京大学社会科学研究所台湾史研究センターから復刻されており、東山京子の解説がある。また東山京子（2012）も参照されたい。

⁷ <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715124>

⁸ 各文書の概要は台湾大学もつけているが、やまだあつし（2019）で指摘したような誤読もあるほか、内容的にも十分とは言えない。

N046 阿眉蕃語 76 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714724>

題名は76枚目画像（一番最後）に貼られた紙「阿眉蕃語」による。3枚目画像に打巴塹庄や拔仔庄の記述がある。5枚目画像から7枚目画像まで拔仔庄阿眉蕃語の対訳、7枚目画像に9月5日とある。その後も対訳が続く。22枚目画像に9月6日とある。30枚目画像に9月8日。32枚目画像に9月13日、璞⁹石閣滞在、34枚目画像で9月14日は璞石閣荘を發し大庄に、38枚目画像では大庄を發し公埔に至るで、各画像とも移動中に見分した事物を書くとともに対訳も続ける。40枚目画像では9月16日で公埔滞在、54枚目画像では9月9日、打馬燕庄滞在、56枚目画像では9月10日、63枚目画像は9月11日、迪街庄を發し、73枚目画像は9月12日、阿微蕃改識蘭庄を發し、璞石閣荘に至る。内容を総合判断すると、9月前半の巡回日誌として書いたのと想定されるが、アミ語の語彙ノート原稿としての分量が多く、後で語彙ノートとして整理したもの。

N047 阿眉蕃語箋卷二 102 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714725>

題名は1枚目画像（表紙）に書かれた文字から。4枚目画像には「台湾島阿眉蕃語箋 第二集 田代安定編輯」とある。5枚目画像には、奇、拔、眉などの文字があり、複数の調査を整理したことがうかがえる。文字もペン書きで整っており、N048やN101の改訂増補版の可能性がある。画像87枚目と画像88枚目は罫を引いただけで空白、画像89枚目から画像94枚目は空白、画像95枚目から画像97枚目は向きが逆になって、言葉（アミ語？）の調査メモ書きあり。

N048 阿眉蕃語 44 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714726>

題名は1枚目画像「阿眉蕃語」と紙が貼られていることによる。5枚目画像に「台湾島東海岸阿微蕃語 田代安定編輯」とある。対訳でローマ字側には、奇（奇萊であろう）の表記がところどころあるので、複数の調査を整理したことがうかがえる。

N062 紅頭嶼支語 其他 94 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714740>

題名は1枚目画像による。「支語」は変な表現で「之語」や「土語」と読みたいところだが、N108の題名（これは明確に支と書かれている）も参考に考えて、紅頭嶼の支族（タオ族）の言語と理解すべきものとした。雑記帳である。15枚目画像に奇萊原野ほか原野が列挙されている。19枚目画像は水尾庄の近くの平原の略図がある。31枚目画像から33枚目画像まで「紅頭嶼土語」。N108と関連がありそうだ。45枚目画像から56枚目画像まで空白。57枚目画像からは逆順となる。

N081 高山蕃語 7 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714759>

⁹ 清末に漢字地名が命名されて以来、璞石閣と表記されていたが、田代は璞を石偏で表記している。

題名は1枚目画像に「高山蕃語」とあることによる。内容は雑多で、文字通りの蕃語は3枚目画像のみ。4枚目画像には、阪氏の原野測量や、新開園で今夜は眠る（筆談での語り）とある。

N100 台東卑南蛮語箋 98 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714778>

題名は1枚目画像に「明治廿九年十月起稿（田代安定編輯） 台東卑南蛮語箋」とあるのによる。6枚目画像にも「台湾島台東卑南蛮語箋 田代安定編輯 明治二十九年十月起稿」とある。各画像とも、射馬干 呂家 大南社 を並べて比較できるようにしてある。文字はペン書きで整っている。71画像から77画像まで空白の後、78画像から「会話編」として中国語とピュマ語の対訳がある。83画像から98画像まで再び空白。63枚目画像には「十二日」とあるが、九州の「門司ニ隔ル凡三百八哩」の海上である。

N101 台東阿眉番語箋 109 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714779>

題名は1枚目画像に「田代安定編輯 台東阿眉蕃語箋 第一集」と貼られた紙による。4枚目画像にも「台東阿眉蕃語箋第壹集 田代安定編輯」とある。各画像ともペン書き部分に鉛筆で加筆があり、集落による語彙の違いを中心に改訂が続けられていたことがわかる。43枚目画像から51枚目画像まで空白だが、52枚目画像から対訳が再開。

N103 台東殖民地予察巡回日誌 108 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714781>

題名は11枚目画像に「台東殖民地予察巡回日誌 明治二十九年 田代安定震卿蔵書 九月十八日朗晴」とあるのによる。12枚目画像より、この日に新開園庄を出発に北西の網網社へ行く。14枚目画像から19枚目画像は網網社の風俗や語彙を記載、19枚目画像は9月19日朗晴、新開園庄に戻る。23枚目画像は9月20日、新開庄を発し、雷公火に向かう、堀氏、安井氏、通事同行す。25枚目画像は9月21日晴で雷公火社憲兵屯所構内滞在、27枚目画像は9月22日川向岸の里瀧社へ行く、32枚目画像は9月23日雷公火社滞在、34枚目画像は9月24日で雷公火社を発し務録台へ、38枚目画像は9月25日で務録台社を発し、成田氏は一搬夫を従えて利喜利喜社へ、久長氏は病気の為務録台に一人留まる、41枚目画像は北勢溝社を発す、43枚目画像は9月27日晴で卑南新街滞在、44枚目画像は9月28日、46枚目画像は29日晴、47枚目画像は30日半晴で卑南新街を発し知本社に向かう48枚目画像には柱に彫られた男性像彫刻あり、49枚目画像は入れ墨や語彙、57枚目画像から上下が逆になる。62枚目画像は9月17日とある。67枚目画像は向きがもとに戻って10月2日晴知本社滞在、70枚目画像は9月3日晴、知本社を発すとある（10月3日の間違いか）、アリパイ社に宿泊す。73枚目画像は10月4日大雨、アリパイ社を発し、卑南者阿眉社を経て新街に向く、74枚目画像は檳榔世格社の青年集会所のスケッチ、79枚目画像は10月5日雨荒天滞在、81枚目画像は10月6日晴強風滞在でこの日から数日は撫墾署に通う、83枚目画像は10月7日晴和風卑南滞在、87枚目画像は8日晴和風滞在、92枚目画像は9日晴滞在、今朝成田技師一先海岸路に向け出発、93枚目画像は10日滞在、95枚目画像は11日

強風滞在、96枚目画像は12日強雨風終日在宿、97枚目画像は13日強風、98枚目画像は14日風止晴、阿眉山に登る、102枚目画像は15日、104枚目画像は17日晴和、卑南社へ行く須田氏も同行。

N104 台東殖民地予察巡回日誌 81 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714782>

題名は1枚目画像（表紙）に縦書き、2枚目画像に横書きで「台東殖民地予察巡回日誌」とあるのによる。5枚目画像に11月17日曇花蓮港を発し、七脚川社に至る、7枚目画像は阿眉語奇来、8枚目画像は七脚川語、9枚目画像（からおそらく14枚目画像まで）は木瓜語、17枚目画像は11月18日晴、木瓜番猴蘭社を出発、27枚目画像は11月19日曇天花蓮港街滞在、39枚目画像は11月21日晴、48枚目画像は11月22日、夕刻米崙営に至り宿ス、51枚目画像は11月23日曇、米崙営、52枚目画像は11月24日（58枚目画像にも、11月24日とある）夜8時花蓮港に着す、60枚目画像は11月27日花蓮港滞在、61枚目画像は11月28日、62枚目画像は11月30日、花蓮港滞在与、12月1日花蓮港滞在、63枚目画像は11月2日花蓮港滞在（12月2日の誤りか）と12月3日花蓮港滞在、64枚目画像は12月4日花蓮港滞在与、12月5日滞在、65枚目画像は、12月6日強風と12月7日強風と12月8日。

N108 台南雲林高山蕃支族語 49 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714786>

題名は1枚目画像に貼られた紙による。4枚目画像には「台湾島雲林高山蕃支族語 田代安定編纂 台東秀孤巒地方拔仔庄 媽媽仏社鑿齒蕃種族 及ヒ皆時仏社 明治二十九年十月自調」とある。18枚目画像から31枚目画像まで空白。32枚目画像から植物についての現地語と日本語との対訳メモ、35枚目画像に恒春蕃語とあるが、植物についての対訳は39枚目画像まで続く。43枚目画像から47枚目までは逆順（47枚目が先頭）で「紅頭嶼探検報告ノ内 紅頭嶼土人語」。

N132 蕃語 39 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714810>

題名は1枚目画像に「蕃語」と紙が貼られていることによる。ただし日本語とローマ字の対訳ノートの残欠の1枚目となる部分に紙を貼っている。1枚目の蕃語の横4文字は（聞き取りした）地名らしいが不明。

N150 [明治廿九年田野筆記] 82 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714834>

題名は台湾大学による。最初から10枚目画像までは漢字（日本語）とローマ字の対訳であり、4枚目画像は南勢番の文字が見える。12枚目画像から埔里社や阿里山の文字が見え東西横断路の検討をしている。17枚目画像に台東日記、12月8日とある。18枚目画像に12月9日、19枚目画像に12月10日と12月11日、20枚目画像に12月12日と12月13日とあるが記述があるのは12月13日から花蓮港出発、千代田丸に乗り込み西海岸回り台北帰途に上る、である。21枚目画像は12月14日、23枚目画像は15日で打狗港着。28枚目画像から54枚目画像まで空

白。55 枚目画像と 56 枚目画像は漢詩、60 枚目画像は台東新調地図とあり、奇来農耕適地 109 万坪などと記されている。65 枚目画像から 77 枚目画像までは八里花社に始まり花蓮港街までの戸数と人口のメモ。

N193 [字彙紀錄] 8 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714882>

題名は台湾大学による。3 枚目画像で漢字（日本語）とローマ字の対訳（未完成）となっており、ローマ字の横に石坑社、馬太鞍、眉社、奇萊の文字が見えるので、アミ語の語彙ノートの原稿らしい。

N225 [台湾東部調査日記] 84 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714914>

題名は台湾大学による。8 枚目画像に 10 月 4 日雨天、12 枚目画像に 10 月 5 日の記事があり、阪氏と堀氏（拓殖課員）や須田氏と別行動で八里環社に入る記述がある。ところが 15 枚目画像に 11 月 6 日晴で八里環社を出発とあって、1 か月のズレがある。22 枚目画像に 11 月 7 日で抜仔庄を出発、25 枚目画像に 11 月 8 日、30 枚目画像に 11 月 10 日で花蓮港宿舎に入る、32 枚目画像に 11 月 11 日で米崙山兵營、42 枚目画像に 11 月 12 日晴、43 枚目画像にタロコ族男性のスケッチ、48 枚目画像に 11 月 13 日朗晴で新城庄滞在、49 枚目画像に太魯閣生番語、76 枚目画像に 11 月 15 日あり、おそらくこの日で使用を終わっている。

1896 年作成（作成年の判断は台湾大学による）

文書番号が T で始まるもの

T016 卑南王史 12 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715049>

題名は 1 枚目画像の冒頭に「卑南王史」と記載されていることによる。縦 11 行×2 の罫紙に漢文で記載されている。2 枚目画像の冒頭には「台東各地里程概記」、3 枚目画像の冒頭には「台東各蕃社庄名一覧」、8 枚目画像の冒頭には「今開民戸大把墾民庄」、8 枚目画像の左側に「呈開大把墾民庄家甲單」、10 枚目画像の冒頭に「哨別社」、12 枚目画像の冒頭に「里程証明書」とあってこれは明治 29 年 9 月 29 日付で台東撫墾署が出したものである。全体として台東撫墾署が事前に集めていた資料と解すべきである。

T051 台東生蕃事項 54 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715084>

題名は 1 枚目画像による。2 枚目画像から縦 11 行×2 で中央に台湾總督府民政局と記載された罫紙に記載され、冒頭に「今將卑南各番者尋問事項詳録于左」とあり漢文で書かれている。14 枚目画像冒頭に「今將秀姑灣拔子庄至厦羅灣社止其処番社風俗埋葬婚姻族制等事項詳列于左」とあり漢文で書かれている。19 枚目画像からは縦 12 行×2 の罫紙で冒頭に「尋問事項」と漢文である。21 枚目画像からは罫のない紙で冒頭に「太魯閣生番社尋問事項」とり漢文である。23 枚目

画像からは同じく冒頭に「新城庄尋問事項質疑」とあり漢文である。25枚目画像からは再び縦11行×2で中央に台湾総督府民政局と記載された罫紙で冒頭に「太魯閣生番尋問事項 明治二十九年十一月 田代安定提題」とあり漢文で書かれている。推敲の跡があり、21枚目画像よりも前の版である。28枚目画像冒頭には「太魯閣生番尋問事項質疑 田代安定録」とあり漢文で書かれている。31枚目画像からは縦12行×2の罫紙で、「峯寛之印」とあり、恒春管下ノ番地について漢字カタカナ混じりで書かれている。37枚目画像からは1行目に「阿微番風俗尋問事項 田代安定提題」とあり、その右欄外に「左件問林金榜氏 後刻要答示」とあり、漢文で書かれている。以降は何枚も尋問事項が続く。ところどころ返答らしい文言もある。40枚目画像からは(37枚目画像から質問は続くものの)用紙が縦11行×2で中央に台湾総督府民政局と記載された罫紙へと変わり、41枚目画像から(質問は続き)用紙が37枚目画像と同じものに戻っている。45枚目画像から用紙が縦11行×2で中央に台湾総督府民政局と記載された罫紙へと戻るとともに推敲跡が目立つ。54枚目画像は牛の各部位についての対訳があり、左端に阪氏と書かれている。

T052 台東巡回報告住民部 58 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715085>

題名は1枚目画像冒頭に「台東巡回報告住民部 田代安定」とあることによる。縦11行×2の罫紙に漢字カタカナ混じりで書かれてあり、推敲跡が目立つ。

T053 台東要書綴 70 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715086>

題名は1枚目画像に「田代安定 台東要書綴」とあることによる。3枚目画像は冒頭に「台東沿革」とあり、縦11行×2で中央に台湾総督府と書かれた罫紙に漢字カタカナ混じりで書かれている。5枚目画像から縦13行×2の罫紙に変わるが20枚目画像まで話は続く。21枚目画像は冒頭に「播種期收穫期収量価格」とあり、縦11行×2で中央に台湾総督府と書かれた罫紙になる。21枚目画像左側には「台東地方賃金 三十年八月調」、22枚目画像には「台東庁管下田反別表 三十年二月調」と「全上米作付反別及收穫表 三十年二月調」、23枚目画像には「重ナル輸出品 三十年四月調」と「台東庁管内 主ナル輸出品 (三十年四月調)」、24枚目画像には「重ナル輸入品」、25枚目画像から「卑南新街ニ於ケル重要品相場」となり縦13行×2の罫紙に変わる。31枚目画像から「諭告台東地方平埔高山各社衆蕃七条烈後 汝衆民等当敬而遵奉慎勿有違致干查究」となり、漢文で書かれて、縦11行×2で中央に台東撫墾署と書かれた罫紙になる。33枚目画像から「卑南地方天灾地変」と冒頭にあって、縦13行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に漢文で書かれている。37枚目画像は「成広澳港況諮問録」となる。これは「明治二十九年十月二十五日 成広澳庄総理 徐才普謹録」である。38枚目画像は「大港総理諮記」とあり、ここから罫紙でなくなる。40枚目画像の最後に「明治二十九年十月三十日 台東大港口 通事蕭友隆 教学黎騰飛 録」とある。42枚目画像から縦11行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙になり、題名不明だが43枚目画像の最後に「林儀鳳録」とある。44枚目画像は別文書でこれも最後に「林儀鳳 (この間割注) 謹録」とある。45枚目は冒頭に「尋問事項」とある。47枚

目から罫紙でなく「諭承墾芒綢埔民人王必文」と冒頭にあって最後に「光緒十九年山岳三十日」とある。49 枚目画像は「奏調台湾補用知府候補直隸州知州代理台東州正堂胡 為」が冒頭で最後に「明治二十九年九月五日抄謄呈」とある。50 枚目画像は「欽加知府銜即補清軍府台東直隸州正堂高 為」が冒頭で最後に「大清十五年十式月起建撤立後山分為五鄉南広新奉蓮為五郷」とある。南広新奉蓮には右に傍点あり。51 枚目画像は冒頭に「奇萊加礼宛社諸事尋問条項」とあり、日付は明治 29 年 8 月 21 日であって、縦 11 行×2 で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に漢文で書かれている。53 枚目画像は冒頭に「新城庄尋問事項 田代安定提題」とあり、漢文で書かれている。54 枚目画像によればこれは明治 29 年 11 月 12 日に台東新城庄の李阿隆へと送られている。55 枚目画像は冒頭に「台東地方戸数人口未調査庄社名」とあり、縦 13 行×2 の罫紙に書かれている。57 枚目画像は「調査報告類綴」とあり、6 文書の名が記載されている。58 枚目画像は七脚川社などの戸数と人口であり、縦 11 行×2 で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙である。59 枚目画像は罫のない紙で、内容からみて新城庄尋問事項への回答である。漢文で書かれている。61 枚目画像は、問追街総理とあるが、今日涉水至觀音山庄近処原野何処として筆談調である。62 枚目画像は「感謝状」と冒頭にあり、漢文であり、63 枚目画像から秀姑巒拔仔庄の通事林金榜が田代安定に宛てたものだと思われる。65 枚目からは感謝状の草稿らしい。68 枚目画像からは「乙号問題 田代安定題」とあり、縦 13 行×2 で中央に東京■■■■と書かれた罫紙に漢文で書かれている。

T074 台湾島台東阿眉蕃語篇卷一～二 126 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715107>

題名は 1 枚目画像冒頭に「台湾島台東阿眉蕃語篇卷一 田代安定編輯」とあることによる。縦 13 行×2 で中央に台湾総督府民政局と記載された罫紙を使い、上に日本語、下にローマ字（抜や奇などとどこのアミ族かを示す注記付）の対訳である。ペンと鉛筆が併用され推敲されているが、N で始まる文書よりも語彙が多く、後の版であると推測できる。123 枚目画像からは七脚川社などの戸数や男女人口などのメモになっている。

T090 [奇萊新城地方頭人致田代安定庄戸籍姓名清冊] 18 画像

<https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715123>

題名は台湾大学による。1 枚目画像に「謹將後山新城等庄戸籍姓名清冊呈送」とあり、2 枚目画像から 16 枚目画像には画像毎に計 15 戸の戸主と家族の氏名と年齢性別が記載されている。17 枚目画像には各戸が所有する牛が記載され、18 枚目画像は、明治 29 年 11 月 日と記載されている。

T102 [番社丁口調査長] 79 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715135>

題名は台湾大学による。1 枚目画像はどこかの集落の戸主の家族数を示す表の途中から始まっている。用紙は縦 11 行×2 で中央に台湾総督府民政局と記載された罫紙である。3 枚目画像には

里瀧社生番とあり、5枚目画像には秀州都巒拔仔庄とあり、以下各地の庄社の明治29年における戸主と家族数が記載されている。

T132 台東調査報告土民部上篇 61 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715165>

題名は1枚目画像に「台東調査報告 土民部上篇 田代安定稿」とあることによる。2枚目画像から縦12行×2の罫紙に清書されて書かれており、推敲は極一部である。

T133 台東各庄丈量済田地彙表 25 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715166>

題名は1枚目画像による。縦11行×2の罫紙に記載されている。2枚目画像冒頭には「台東各庄丈量済田地表説明」とあり、2枚目画像から4枚目画像までは、漢字カタカナ混じりで記載されている。5枚目画像冒頭には「台東各庄丈量済田地概算表」とある。田代安定編纂とあるが、ここからは漢文となる。21枚目画像の途中から「成広澳石両傘両庄田籍表」となる。

T134 台東旧記論書類説明 60 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715167>

題名は1枚目画像の冒頭に「台東旧記論書類説明」とあることによる。用紙は縦13行×2で中央に拓殖務省と書かれた罫紙である。清書されており7枚目画像まで推敲は極一部である。8枚目画像から用紙が縦12行×2の罫紙にかわり、冒頭に「台東現在住民戸数人口統計表説明」とあり、ここと9枚目画像は推敲が多い。11枚目画像は冒頭に「台東現在住民戸数人口概表」とあり、ここから15枚目画像までは色分けした清書となっている。その後の概表は、清書度が下がる。

1897年作成（作成年の判断は台湾大学による）

文書番号がNで始まるもの

N028 明治三十年 99 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714706>

題名は99枚目画像に「明治三十年 日記」とあることによる。雑記帳であり、しばしば上下が反対に記載してある。8枚目画像から10枚目画像は田代が漢詩を鉛筆で記している。11枚目画像から15枚目画像は「補缺用書類」として手元にない？雑誌を記載している。16枚目画像には「天剣日曆」とあるが、日付が出てくるのは18枚目画像で、5月11日とある。「午前八時三十分ヨリ拓殖務省ニ出頭九時着 技術官室ニ入ル製図師・・・既ニ出頭中 昨日ヨリ中央路線製図ニ着手シ南澳番界ヲ起点トシ今朝ヨリ新城原野ニ掛ル」とあり、報告の図面は田代が作成したのではなく、（東京の）拓殖務省で作成したようだ。その後はまた雑記帳に戻る。次に日付が出てくるのは40枚目画像で8月23日である。52枚目画像から56枚目画像まで空白。ここからは逆順で書かれているようだが、雑記帳にしか読めない。台東調査の記事があるとはいえ、東京での雑記帳である。

N039 天剣雑録 49 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714717>

題名は2枚目画像に「天剣雑録 此主 田代安定」とあることによる。なお1枚目画像に「雑録（他書ヨリ抄録の方也）」とある。5枚目画像から27枚目画像は「台湾糖業調査書 台湾総督府民政局技師 原熙」の抜き書きである。28枚目画像から39枚目画像は空白。40枚目画像から42枚目画像は「日本帝国第十四統計年鑑（明治二十八年十二月刊行）」の抜き書き。44枚目画像と45枚目画像は「北海道殖民地撰定報文」の抜き書き。フィールドでなく、図書室のようなところでの作成であろうが、殖民地撰定に関連性がある抜き書きである。

1897年作成（作成年の判断は台湾大学による）

文書番号がTで始まるもの

T054 台東現在住民人口表 45 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715087>

題名は1枚目画像に「台東現在住民人口表 田代安定調成」とあることによる。縦13行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に書かれている。読むことはできるが清書ではなく、欄外にも書き込みがある。6枚目画像から「第二区 自木瓜溪至水尾溪北岸各社」となるが、ここから人口だけでなく正副の社長や通事の氏名、さらには水田面積や水牛頭数まで記載されている。38枚目画像から39枚目画像までは、左下に一ツ松出版と書かれた11行×2の罫紙を使っている。41枚目画像から45枚目画像は「謹テ述フ卑官」から始まる田代安定（および成田、阪、堀）の調査復命（明治30年1月15日）となっている。45枚目画像では、追って提出予定の報告は、「第一項 地理部 第二項 植民部 第三項 樹木部 第四項 業務部」とある。これはT055の7枚目画像から21枚目画像の復命書の初稿らしい（記述はかなり違う）。

T055 台東調査報告 34 画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715088>

題名は1枚目画像に「第一綴 田代安定控稿 台東調査報告」とあることによる。2枚目画像は、冒頭に「台湾島台東調査報告総目録」とあり、縦12行×2の罫紙に清書されている（若干の修正がある）。ここから6枚目画像までは報告の総目次である。7冊の報告が想定されており、第1冊が復命書などこのT055の内容、第2冊が「台東調査報告土民部第一綴」、第3冊が「台東調査報告土民部第二綴」、第4冊が「台東調査報告業務部上篇」、第5冊が「台東調査報告業務部下篇第一綴」、第6冊が「台東調査報告業務部下篇第二綴」、第7冊が「台東調査報告地理部第一綴」である。7枚目画像は「台東巡回復命書 完」とあり、ここから21枚目画像まで明治30年1月15日付の復命書である。T054の41枚目画像から45枚目画像の改訂版らしい。ここでの項目の順番は13枚目画像によれば「第一項 土民部 ~~上下両篇 上篇ハ普通土民下篇ハ生蕃事情~~ 第二項 業務部 上下両篇 第三項 地理部 第四項 植民部」である。これにも若干の修正がある。23枚目画像冒頭は「台東郵便線路布設用地参考表説明書」とあり、ここから25枚目画像

まで明治30年1月12日付で説明されている。26枚目画像冒頭に「台東郵便線路布設用地地名参考表」とあり、33枚目画像まで続いている。

T056 台東調査報告地理部第一綴 36画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715089>

題名は1枚目画像に「台東調査報告地理部第一綴」とあることによる。縦11行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に清書されている。ただし2枚目画像からは縦11行×2だが中央に文字がない罫紙である。読み易い文書ではあるが清書ではない。35枚目画像の最後は赤字で書き込みがある。

T057 台東調査報告地理部第二綴 28画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715090>

題名は1枚目画像に「台東調査報告地理部第二綴」とあることによる。縦13行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に清書されている。2枚目画像から同じ罫紙に明示30年8月付で清書されている。

T058 台東調査報告地理部付録：台東平野面積表 30画像

<https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715091>

題名は1枚目画像に「台東調査報告地理部付録 台東平野面積表」とあることによる。2枚目画像から縦12行×の罫紙に清書されており、2枚目画像冒頭には「台東調査報告地理部付録 明治三十年八月 田代安定」とある。5枚目画像と6枚目画像と23枚目画像と29枚目画像は赤で数字が訂正されている。

T059 台東調査報告業務部 174画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715092>

題名は1枚目画像に「報告第二項ノ壺 台東調査報告業務部上篇」とあることによる。縦13行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に清書（ただし田代の文字か）されている。後半部はやや字が崩れる。67枚目画像から「報告第二項ノ式 台東調査報告業務部下篇 第一綴」、121枚目画像から「報告第二項ノ三 台東調査報告業務部下篇 第二綴」

T060 台東調査報告業務部上篇 67画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715093>

題名は1枚目画像の冒頭に「台東調査報告業務部上篇 田代安定 業務部中篇」とあることによる。縦13行×2で中央に台湾総督府民政局と書かれた罫紙に清書（ただし田代の文字か）されている。54枚目画像から「台東調査報告業務部下篇」となる。

T061 台東調査報告業務部下篇 54画像 <https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/715094>

題名は1枚目画像に「第二綴 台東調査報告業務部下篇 製板業 製糖業ノ部 田代安定控稿」とあることによる。2枚目画像の冒頭には「台東調査報告業務部下篇第一綴 田代安

定 業務部下篇 台東将来業務上ノ目途」とある。2枚目画像から12行×2の罫紙に清書されている。

以上の整理からわかることは以下である。

Nが文書番号の冒頭につくのは、いわゆる出先で作成された、フィールドノートである。主に1896年の台東調査の時期に作成されている。1897年にもN文書はあるが、点数も少なく出張先での雑記帳と抜き書き帳である。1896年のN文書は（N046を除き）語彙ノートと巡回日誌に分かれる。

語彙ノートは、卑南（ピュマ）語ノートが3点（うちN011は一部にアミ語あり）、阿眉（アミ：阿微とも書いている）語ノートが6点（N046は巡回日誌を兼ね、N011は大半がピュマ語ノート）、紅頭嶼（タオ）語ノートが2点（N108は部分のみ、N062もタオ語とは関係ない記事がある）、何語かわからないノートが2点ある。ピュマ語とアミ語は、巡回日誌に併記して現場で作成しているN046、巡回日誌と分けた後で聞き取りの現場で作成したらしい原稿（N011）、アミ語だけ独立させたがやはり現場で書いた原稿（N913）と、その後に宿舍かどこか机の上で整理したノートとがある。ピュマ語は語彙ノート（N100）と会話篇（N014）とに分かれている。アミ語ノートは、複数回の改訂が行われ（最初はN193、次いでN101、最後にN047）、地域別の語彙の違いが意識される他、語彙数も増えている。

巡回日誌の系統は5点ある。月日からおおむね、N046（9月前半）、N103（9月から10月）、N225（10月から11月前半）、N104（11月後半から12月）、N150（12月）の順に作成されている。N046は上述の通り、アミ族の語彙ノートを兼ねている。

Tが文書番号の冒頭につくのは、主に罫紙に書かれた原稿である。1896年から1897年に書かれている。1896年の文書の多くは、台東で収集した資料であり、1897年の文書の多くは、田代による台東調査の報告の下書きもしくは控えである。

収集した文書には2種類あり、1つは当時の台東における民政機構であった台東撫墾署が収集した文書（を田代が入手したもの）であり、もう1つは田代自らデータ収集した調査である。台東撫墾署が収集した文書は、T016、T053（の一部）、T090、T102、T133、T134でと想定できる。日本占領以前の歴史についての記録（文書の写し）や現地有力者による説明、そして台東各村落（漢民族の村落である庄、原住民族の村落である社）の人口や土地のデータである。村落のデータは地方により精粗があり、『台東殖民地予察報文』でも精粗の差は埋まっていない。

田代自らデータ収集した調査のうち、T074は上述のN文書のアミ語ノートを罫紙に整理したものであるが、他は筆談による調査（対面もしくは調査用紙を渡して後日回答をもらう）である。T051には「尋問事項」と名付けられた多岐にわたる調査項目が（調査項目を選んだ下書きとともに）掲載されている。T053（の一部）も尋問事項が掲載されている。

報告文書は、総論に当たる「調査復命書」と、各論に当たる部分がある。『台東殖民地予察報文』では、「調査復命書」が総序となり、各論が地理部、土民部、業務部として記載されてい

る。

「調査復命書」は、初稿が T054 にあり、その改稿が T055 にある。『台東殖民地予察報文』ではさらに改稿されている。それぞれ各論の構想（見え消しは原文のママ）が記載されているが、以下の通りかなり違う。

T054 第一項 地理部 第二項 植民部 第三項 樹木部 第四項 業務部

T055 第一項 土民部 ~~上下両篇 上篇ハ普通土民下篇ハ生蕃事情~~ 第二項 業務部 上下両篇 第三項 地理部 第四項 植民部

『台東殖民地予察報文』 第一項 地理部 第二項 土民部 第三項 業務部（上篇 水利港湾ノ現況 中篇 土民ノ現業 下篇 殖民事業ノ目途）

各論のうち T 文書にあるのは、地理部が T055（の一部）、T056、T057、T058、土民部が T052、T132、T054、業務部が T059、T060、T061 となる。このうち、T056 や T057 は「台湾総督府公文類纂」に「台東調査報告地理部第一、第二技師田代安定提出」として掲載されている¹⁰。一方、業務部の文書は「台湾総督府公文類纂」には掲載されておらず、直接『台東殖民地予察報文』にまとめられている。

これらの推敲状況はまちまちである。特に大幅な変更があったのは、T056 と T057 であり、「台湾総督府公文類纂」には掲載されたものの、『台東殖民地予察報文』では記述の重要部分であった「原野」の具体的な記述が、業務部下篇の 206～213 頁で糖業区（サトウキビ栽培区域）の記述に少し取り入れた以外は、ぱつさり切り落とされている。「植民部」の未着手など、調査から『台東殖民地予察報文』刊行までの間に、多くの紆余曲折があったことがうかがえる。

2. 『台東殖民地予察報文』と『北海道殖民地撰定報文』

台湾の殖民地撰定は、北海道での殖民地撰定を手本として、日本人移民を台湾に入れることを目的とした事業である。1896 年 4 月の台湾総督府の民政移管とともに、台湾総督府民政局殖産部は 2 課構成から 4 課構成となったが、それまでの農務課と商工課を単純に分けるのではなく、農務課と商工課を農商課としてまとめた上で、拓殖課と林務課と鉱務課を新設し、日本人移民を招致しようとした¹¹。高級官僚も農商課は課長 1 名が技師（高級技術官僚）のみなのに対し、他の 3 課は複数の技師を配置しており、拓殖（殖民地撰定などの農地開発）、林務（森林開発）、鉱務（鉱業開発）による日本人の経営者や農民などの入植に力を入れる体制とした。特に拓殖課は、北海道の殖民地撰定の第一人者で、殖民地撰定をもう 1 名の技師とともに主導し、最初の入植で

¹⁰ 台湾総督府公文類纂 4532 卷「明治三十年台湾総督府公文類纂十五年保存第十五卷殖産」第 10 件。

¹¹ 台湾総督府民政局長の初代殖産部長で、元・札幌農学校校長であった橋口文蔵による、殖産部の 4 課分課構想と日本人移民招致は、台湾総督府公文類纂 2 卷「明治二十八年台湾総督府公文類纂甲種永久保存第二卷官規官職」第 31 件「殖産部長分課規定意見」に載る。

ある新十津川のトック原野への十津川被災者入植も指揮した柳本通義を、北海道庁から引き抜いて課長(技師)とし、さらに課員(技手)に北海道での測量経験者(殖民地撰定やその関連事業の経験者といって良い)を複数、配した。柳本以外の技師は、田代や成田のように北海道とは関係ない面々であるが、田代は八重山での調査経験、成田はメキシコでの調査経験があり、能力に不足はない。

北海道の殖民地撰定では報告書として『北海道殖民地撰定報文』¹²が刊行された。北海道各地に入植可能地の「原野」の概要を示したものである。和人の農業入植者を入れるのが前提であるから、土地の場所や面積だけでなく、土質、気候、用水や排水、交通などが記載されている。概要には住民として、先住民であるアイヌ人だけでなく、その周辺にすでに居住している和人の状況も記載されているが、あくまでもどんなところに何人いるという話に留まり、文化に関する事項は記載されていない。また概要であるので、詳細な地図はなく、実際に入植する場合は具体的な入植の区画配分などを設計する必要がある。北海道では上述の通り柳本通義の指揮によって、トック原野で最初の区画配分が行われたが、これは『北海道殖民地撰定報文』でなく、別に計画が作成され、土地区画図も作成された¹³。『北海道殖民地撰定報文』は、田代安定も手書き資料N039にて一部を抜き書きしただけでなく刊本の現物も保有し、それは台湾大学の田代安定文庫に現存する¹⁴。上述の通り、殖産部拓殖課員には北海道経験者が多く、課員に北海道殖民地撰定の経験は共有されていたと考えて問題なかろう。

殖民地撰定事業の成果物として『北海道殖民地撰定報文』を読んだ目で、『台東殖民地予察報文』を読むと、種々の違いを見出すことができる。最大の違いは上述の通り、『北海道殖民地撰定報文』は殖民地撰定事業に集中、言い換えると「原野」という開発可能な土地はどこかの調査に集中しているのに対し、『台東殖民地予察報文』が、業務部下篇を中心とする台東の開発計画が前面に出、「原野」が後景に退いていることにある。同じ田代安定の調査と比較しても、1898年5月17日付で報告された鳳山や台南での調査である「台南鳳山両縣下殖民地調査田代技師外二名報告」¹⁵では見出すことができない特徴である。「台南鳳山両縣下殖民地調査田代技師外二名報告」は、『北海道殖民地撰定報文』同様、調査地域の「原野」の場所や状況が報告されており、他はせいぜいその原野の清代の歴史や入植しようとする日本人¹⁶の開発計画へのコメントが掲載されているだけである。

¹² 北海道庁第二部殖民課編(1891)。1897年には、続編にあたる第二報文と第三報文も、北海道庁内務部殖民課編で刊行されている。また1905年に日本の植民地となった樺太(サハリン)南部についても同じような内容で、樺太庁第二部拓殖課編(1910)『樺太殖民地撰定報文』が刊行された。

¹³ 小林宏吉編『新十津川町史』(新十津川町役場、1966年)の「第5章 開拓」等を参照されたい。

¹⁴ 索書号: 田代(日)21

https://ntu.primo.exlibrisgroup.com/discovery/fulldisplay?docid=alma991021711319704786&context=L&vid=886NTU_IN-ST:886NTU_INST

¹⁵ 台湾總督府公文類纂302卷「明治三十一年台湾總督府公文類纂乙種永久保存第四十四卷殖産」第3件「台南鳳山両縣下殖民地調査田代技師外二名報告」。

¹⁶ 岐阜県人の入植計画があった。1896年に岐阜県は北陸各県とともに大水害があり、被災民の県外移住が各地で進められたが、その一環であった。台湾への入植計画は成功せず、北海道(特に1896年から入植が始まった十勝)へと入植することとなる。この詳細は別稿を用意している。参考までに岐阜県人の十勝開拓については、レファレンス共同データベースに参考文献リストの記載がある。https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000190388

『台東殖民地予察報文』で開発計画を記載された「第三項 業務部 下篇 殖民事業ノ目途」において、田代は「第一章 殖産事業ノ方針」「第二章 製板事業」「第三章 樟脳製造業」「第四章 製糖事業」「第五章 農林副産物ノ業途」「第六章 果実栽培業」と章を分けて記述している。分量は第1章が6頁半、第2章が10頁、第3章が6頁、第4章が23頁、第5章が22頁、第6章が7頁である。ただし第5章は苧麻、黄麻、木藍、山藍、煙草、草綿、珈琲樹、護謨樹、カッサヴァ、マニラループ草の11種類の記述の集成であることを考慮すれば、田代が製糖事業（191-214頁）を最も重視していることが一目瞭然となる¹⁷。他の各章が事業の有望さや必要性を説きはするものの、具体的な場所を欠くのに対し、製糖事業は（当初は地理篇で詳細に記載されていた）原野について

甲第一糖業区 奇萊原野ノ内七百七十七町歩

其区域ハ加礼宛平野ヲ中点トシ北ハ三棧溪南岸ニ至リ南ハ米崙山附近ニ亘リテ適当ノ地ヲ撰出スルノ予定ナリ（207頁）

のように、簡略化された形で、面積も総面積でなくそこ建設する糖業プランテーションの面積だけを計上する形ながら「糖区」と称して記載し、それぞれの糖区について、どの程度の能力の製糖所を建てるのか、移住民を何戸移住させるのか計画している。

『台東殖民地予察報文』の台東開発計画は妥当なものだろうか。『北海道殖民地撰定報文』では、予定される土地利用として、「耕地」や「放牧地」が記載されている。このうち「放牧地」は、傾斜や気候の観点から農耕には不適であり、牧草栽培による放牧利用が推奨される土地である。放牧される家畜の種類は定められていない。一方、「耕地」においても、具体的に入植者が何を植え付けるかは、定められていない。そもそも北海道の殖民計画において、入植者が何を植え付けるかは、1880年代まで稲作が抑制されていたのを除き、農民の自由意志に任されていた。現実問題として、木々が生え地形も平坦とはいえず、土壌改良が必要な個所も多かった北海道の「原野」を、限られた年限で開墾して栽培を行い（年限内に開墾できていない「原野」は北海道庁への返却が必要である）、自給食糧も確保するためには、その土地で育つものを取りあえず植えて開墾の実績を作り、その後で耕地を整備しながら本来狙っていた作物の栽培へと転換する必要があった。最初から特定作物の農耕栽培を目的とする農場経営を行おうとした場合、栽培が安定するまで長期的な資金と物資の供給が必要であり、よほど企業的な経営を行わなければ成功し得なかった。北海道で多くの華族や企業が大面積の土地開拓許可を得ながらも、プランテーション農業が成立せず、本州同様の地主と小経営の小作との関係が成立したのに留まった所以である。そのような北海道の状況を念頭に、田代の糖業プランテーション農業指向をどう評価すべきだろうか。台湾製糖株式会社の設立でさえ難渋した1900年時点での日本の民間企業の体力

¹⁷ 『台東殖民地予察報文』の製糖事業重視は、すでに陳偉智（2020）が指摘している。

を考慮すれば、これは台湾総督府がよほどの資金的支援をしなければ成し得ない計画であり、現実的であったとは言い難い。田代の糖業プランテーション計画は、『台東殖民地予察報文』の業務部下篇にこっそり書いてあって、熟読しなければ見出し得ないものである。もしわかりやすいところに書いてあったら、そのまま出版できたか疑わしい。

おわりにかえて

田代安定の手書き資料、特に版の違いや推敲内容は、彼の思考過程と思考の変遷を読み解く鍵となる。やまだあつし（2019）は、田代安定の台湾後期の熱帯植物学体系の発展を、鹿児島高等農林での講義ノートの版の違いから明らかにしたが、台湾初期の大作である『台東殖民地予察報文』でも、完成版となる刊本の前の手書き原稿や公文類纂での報告とで版の違いがある。原稿によっては推敲の跡が目立つものもある。本論は、とりあえず手書き原稿を読んだという段階に留まり、版毎のきちんとした比較はできていないが、きちんと比較すれば、田代の台東の開発構想がどのような変化を遂げたか、明らかにすることができるはずである。

『台東殖民地予察報文』に限らず、田代の構想が当時の台湾総督府首脳部に取り上げられることは少なかった。取り上げられた場合でも、恒春熱帯植物育種場のような限定的なものに留まった。これを田代の先進性（そして台湾総督府首脳部の消極性）と解することも可能であるが、筆者としては田代の計画の非現実性を、首脳部が見抜いたことと解したい。『北海道殖民地撰定報文』など同様目的の報告書と細部を読み比べると、田代の計画の細部は、現実の開拓では成功し得ない記述であると、筆者は考えている。

※本論は、科学研究費・基盤研究 C「課題番号：19K00998」による研究成果の一部である。

参考文献

大浜郁子（2013a）「田代安定にみる恒春と八重山——「牡丹社事件」と熱帯植物殖育上設置の関連を中心に」（国立政治大学民族学系『民族学界』第 31 号、2013 年 4 月、219-246 頁）

（2013b）「田代安定はなぜ沖縄から台湾へ異動したのか——田代による「旧慣」調査の前提作業として」（国史館台湾文献館『第七屆台湾総督府档案学術検討会論文集』、2013 年 5 月、449-462 頁）

（2014a）「近代日本による沖縄と台湾への「旧慣」調査の比較——田代安定の調査を中心に」（Polish Association for Japanese Studies “*Japanese Civilization: Tokens and Manifestations*” 2014 年）

（2014b）「台湾・東南地域の「原住民」統治と沖縄・八重山統治の比較研究——田代安定の「旧慣」調査に基づく政策形成を軸に」（国立政治大学原住民族研究中心『第七屆台日原住民族研究論壇論文集』、2014 年 10 月、223-233 頁）

(2015)「田代安定の台東調査にみるタロコ」(国立政治大学原住民族研究中心『第八届台日原住民族研究論壇論文集』、2015年10月)

(2017)「田代安定にみる沖縄と台湾における「旧慣」調査と統治政策の形成」(国史館台湾文献館『第九届台湾総督府档案学術検討会論文集』、2017年6月、305-329頁)

(2019)「近代日本による沖縄と台湾への「旧慣」調査の比較研究——田代安定の調査を中心に」(Polish Association for Japanese Studies “*Japanese Civilization: Tokens and Manifestations*” 2019年6月、117-131頁)

樺太庁第二部拓殖課編(1910)『樺太殖民地撰定報文』(同課、1910年5月)

中生勝美(2011)「田代安定伝序説——人類学前史としての応用博物学」(東洋英和女学院大学『現代史研究』第7号、2011年3月、129-164頁)

名越護(2017)『田代安定—南島植物学、民俗学の泰斗』(南方新社、2017年3月)

台湾総督府民政部殖産課編(1900)『台東殖民地予察報文』(同課、1900年3月)

田代安定(1917)『日本苧麻興業意見』(国光印刷、1917年7月)

(1945)長谷部言人校訂『沖縄結縄考』(養徳社、1945年7月)

陳偉智(2020)『田代安定——博物学、田野技艺与殖民発展論』(国立台湾大学博士論文、2020年1月)

東山京子(2012)「台湾総督府の殖産政策における史料学的分析——台湾統治初期の「殖産報文」と「復命書」からの考察」(中京大学社会科学研究所『社会科学研究』第32巻第2号、2012年3月、299-350頁)

北海道庁第二部殖民課編(1891)『北海道殖民地撰定報文』(同課、1891年3月)

北海道庁内務部殖民課編(1897a)『北海道殖民地撰定第二報文』(同課、1897年4月)

(1897b)『北海道殖民地撰定第二報文』(同課、1897年9月)

やまだあつし(2019)「高等農林学校と植民地の知——鹿児島高等農林学校での田代安定の講義を中心に」(松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』、思文閣出版、2019年2月、295-325頁)

(2021)「統治初期台湾の日本人移民計画——「殖民地撰定」事業を中心に」(名古屋市立大学大学院『人間文化研究』第36号、2021年7月、85-115頁)

(2022)「押川則吉と台湾総督府殖産部(1895~1897)」(名古屋市立大学大学院『人間文化研究』第37号、2022年1月、119-130頁)